

科学研究費助成事業 研究成果報告書



令和 6 年 6 月 26 日現在

機関番号： 9 9 9 9 9
研究種目： 奨励研究
研究期間： 2023 ~ 2023
課題番号： 2 3 H 0 5 0 0 2
研究課題名 個人メタ認知トレーニングによる統合失調症者の自己効力感とストレス対処能力への影響

研究代表者

黒田 香苗 (Kuroda, Kanae)

医療法人新淡路病院・臨床心理士

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 480,000 円

研究成果の概要：統合失調症者にMCT+を行うことで、退院を具体的に目指すための支援に関する研究を行った。MCT+実施の前後でPANSS（陽性・陰性症状評価尺度）、自己効力感、ストレス対処能力の評価を行った。今回の研究については、参加者2名の解析を行った。第1モジュール開始前と、第10モジュール終了後にPANSSの陽性症状、地域生活に対する自己効力感尺度（SECL）、13項目7件法SOCスケール日本語版を測定した。2名の参加者とも、MCT+において陽性症状、自己効力感への影響が見られた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

統合失調症者の多くは、認知バイアスを含む様々な社会的認知障害を持つことが報告されている。このバイアスに対しアプローチするメタ認知トレーニング日本語版（Metacognitive Training：MCT-J）が行われており、これに対して、トレーナーと1対1で行われる個人用を開発されたMCT+がある。これは認知バイアスの変容や結論への飛躍など症状悪化につながりやすい思考に心理的介入を行うものである。本研究課題では、統合失調症者にMCT+を行うことで、退院を阻む要因へアプローチし、退院を具体的に目指すための支援に関する研究を行った。

研究分野：心理学

キーワード： 統合失調症 メタ認知トレーニング 自己効力感 首尾一貫感覚

1. 研究の目的

統合失調症患者の入院が長引くことや、退院を阻む原因の一例として、池淵ら（2008）は、陽性症状の一部（敵意、興奮、猜疑心）や自己効力感が影響していると報告している。

統合失調症患者は、認知バイアスを含む様々な社会的認知障害を持つことが報告されており（Green,2000）これを修正する訓練として、メタ認知トレーニング（MCT）が開発されている（Moritz,2007）。MCTは認知行動療法の基礎理論を背景とし、認知バイアスなどの題材について集団討論を行い、認知の柔軟性を高め、適応的な行動変容を目指すものである。陽性症状、特に妄想軽減に有効であり、最近日本版（MCT-J）が開発された（Ishikawa,2020）。MCT-Jでは陽性症状、認知バイアス、認知機能の上昇の効果がみられるといった先行研究がある。このため入院患者にも同様の変化があれば、症状が安定し、退院につながる好ましい影響を与える支援が可能である。

従来のMCT-Jに対して、トレーナーと1対1で行われる個人用に開発されたMCT+があり、これはPCやタブレット端末でスライドを見ながら行い、認知バイアスの変容や結論への飛躍など症状悪化につながりやすい思考に心理的介入を行うものである。個別に行うことで集団では介入が難しい者に対しても、本人の体調や環境に柔軟に介入できる利点がある。

長期入院患者は、認知バイアスの偏りや、認知機能低下によって、日常生活や対人関係によるストレスにさらされやすく、症状が不安定となりやすい。それにより様々な制限を生み、退院が困難となる負のスパイラルに陥りやすいと考えられる。

本研究では、統合失調症患者のMCT+の陽性症状への効果を確認すること、自己効力感およびストレス対処能力の向上がみられるかを明らかにすることを目的とした。それによって集団での活動が困難な者に対して、さらには感染症対策で集団の心理治療的活動が難しい状況においても一定の治療機会を与えることが可能となる。自己効力感やストレスへの対処能力が高まることで退院を具体的に目指すための支援につながると考えられる。

2. 研究成果

週に一回、一回60分のセッションを10回行った。これはMCT-Jネットワークで紹介されている日本語版のMCT+マニュアルとセッション資料（<https://mct-j.jp.org/>参照）に基づいて行った。MCT+プログラムには、10のモジュールテーマが含まれた。ユニット1：関係構築とアセスメント、ユニット2：メタ認知トレーニング（MCT+）への招待、ユニット3：素因—ストレスモデル、ユニット4：帰属スタイル、ユニット5：正しい結論をください、ユニット6：思い込みを変えよう、ユニット7：相手の気持ちを理解する、ユニット8：記憶、ユニット9：自尊心と気分、ユニット10：再発を防ぐといった内容で構成された。

研究参加者は統合失調症と診断された40代A氏と50代B氏の男性2名である。MCT+実施にはMCT-Jネットワーク研修を受講した臨床心理士が行った。PANSS陽性症状については精神科医が行った。

評価項目はPANSS（陽性・陰性症状評価尺度）の陽性症状、社会生活に対する自己効力感尺度（SECL）、ストレス対処能力として首尾一貫感覚（13項目7件法SOCスケール日本語版）とした。

第1モジュール開始前と、第10モジュール終了時にPANSSの陽性症状、SECL、SOCスケール日本語版を測定した。本研究は、神戸大学大学院保健学研究科倫理委員会で承認された。参加者は研究に関する十分な説明を受けた後、書面による同意を得た。

2名ともPANSSの陽性症状の減少、SECLの得点の上昇が見られた。SOCスケール日本語版得点については1名については上昇、1名については減少が見られたが、把握可能感においては2名とも得点の上昇が見られた（表1）。

2名の参加者とも、MCT+において陽性症状、自己効力感への効果が見られた。

表1 参加者におけるMCT開始前後の各項目の点数の変化

	A氏 開始前	A氏 終了時	B氏 開始前	B氏 終了時
PANSS 陽性症状（点）	23	18	21	20
SECL（点）	112	128	61	85
SOC スケール（点）	51	50	42	57
把握可能感	15	18	10	19
処理可能感	14	14	16	20
有意味感	22	18	16	18

PANSS 陽性症状については、MCT 群と対照群との比較においてメタ分析（Eithiner et al., 2016 ; Philipp et al., 2019）の報告では効果が見られており、本研究でもPANSS 陽性症状への

効果が見られる結果となった。

自己効力感について、地域生活に対する自己効力感の点数が上昇した。多くの統合失調症の患者は自尊心が低く (Moritz, et al., 2010; Gerlinger et al., 2013; Ciufolini et al., 2015; ; Sundag et al., 2015) 誇大妄想や被害妄想に結びつくと考えられている (Murphy et al., 2018)。統合失調症者の自己概念は主観的な幸福と症状の回復に重要な役割を果たし、特に自尊心と自己効力感、回復過程において重要であることが指摘されている (Yanos and Moos., 2007)。MCT+には自尊心が低くなる理由を学習し、日常生活におけるネガティブな側面や自分の欠陥と思い込んでいるものではなく、自分のポジティブな側面に注意を向けることや、自分自身についてポジティブな部分を高く評価したりすることの大切さを学ぶ。さらに参加者の自尊心を向上させるためのアドバイスが示される。このような「病気を持つ自分への偏った思い込み」について問題提起し、治療的な方法を教示することにより、統合失調症者の低い自尊感情や、自信の無さが軽減した可能性がある。自尊心が高い者は自己効力感についても高くなるため (Otsuka et al., 2002) MCTによって自己効力感が高まることは当然であるといえる。さらに全モジュールの中で取り扱った内容について、生活の中で振り返る機会が得られ、自己効力感が高まる機会が増加した可能性がある。また、Bandura (1977) は、達成体験と言葉による説得が自己効力感の向上に重要であることを述べているが、MCTの最中では、トレーナーから様々な励ましや言語的な説得などが行われていた。そのため参加者の自己効力感が高まったとも考えられる。

首尾一貫感覚については、統合失調症のSOCの低下と、統合失調症の陽性症状及び陰性症状との間に統計的に有意な関連性が示され、病気の症状が強まるほど、SOCの点数は低下するとの研究がある (Bengtsson-Tops., 2008)。さらに、日本の統合失調症患者のSOCの平均得点は健常者と比較して有意に低く、SOCを上昇させる介入の必要性が述べられてきた (Izydorczyk et al., 2019)。本研究では、SOCの下位項目である把握可能感の点数が上昇した。

把握可能感とは、自分の置かれている状況を理解できているという感覚 (Antonofsky., 1987) である。本研究ではMCT+の最終日に、参加者全員が満足度評価票を記入した。その結果、病気の知識の理解、対処スキルを獲得する機会を得たという報告が得られた。MCT+で得られた認知バイアスの知識やその内容を理解し、病識の高まりと同時に、自分自身の治療にとって重要であると認識することにより、把握可能性を高めた可能性がある。Izydorczykら (2019) は把握可能感が首尾一貫感覚の重要な項目であり、統合失調症患者の治療と回復のプロセスにとって重要である可能性があるとして述べている。本研究で実施したMCT+が、全体的な症状を低減させる働きをさせる把握可能感を強め、それによって再発を防ぐ可能性を高めた可能性がある。

しかし、首尾一貫感覚全体としての得点は有意な上昇が見られなかった。これは、参加者の病歴や環境因など様々な背景が影響すると考えられる。そのため、MCTの介入だけでは首尾一貫感覚を上昇させることは難しい可能性があると考えられる。

本研究の結果、2事例ではあるが、MCT+の介入を実施した。実施後の評価によって、陽性症状は低下し、地域生活の自己効力感が上昇した。このことは、退院を具体的に目指すための支援や退院後の地域生活の定着につながると考えられる。

本研究の限界は、まずサンプルサイズが小さく、二重盲検化比較試験が出来なかった。そのため今回の結果については一般化することは困難である。さらに本研究のアウトカムは自己申告式の評価であり、一部の参加者が自己報告の中で社会的に望ましい回答を行った可能性があり、結果にバイアスがかかる可能性がある。今後の研究では参加者を増やし、二重盲検化比較試験や多施設研究を行うなど、MCT+の効果を詳細に検討することが必要である。

主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1．発表者名 黒田香苗 堀貴晴 林敦子
2．発表標題 地域在住精神障害者を対象としたメタ認知トレーニングによる首尾一貫感覚、社会的機能への介入効果
3．学会等名 日本精神障害者リハビリテーション学会第30回岡山大会
4．発表年 2023年

1．発表者名 Kanae Kuroda Takaharu Hori Atsuko Hayashi
2．発表標題 Metacognitive Training Effects on Positive symptoms, Self-efficacy, and Cognitive Function in Community-Dwelling Psychosis during the COVID-19 Pandemic
3．学会等名 2023 International Neuropsychological Society Taiwan Meeting (INS 2023 Taiwan Meeting) (国際学会)
4．発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

研究組織（研究協力者）

氏名	ローマ字氏名
----	--------